日刊工業新聞

年月日	26	06	25	ページ	26	NO.	

PR

CADDi supported by

トップが語る『モノづくり企業の未来ビジョン』

道路機械を通じて社会に貢献する

範多機械（大阪市西淀川区）は、1887年（慶応3）に来日した英国人実業家、エドワード・ハズレット・ハンタ氏が設立した範多商会がルーツ。範多商会の機械部が独立して1925年（昭30）に発足したのが範多機械だ。設立以来、一貫して小型道路機械を手掛け、専門メーカーとしての地歩を固めてきた。70年間、一度も赤字を出したことのない堅実経営が自慢。昨年（2025年）11月に就任した大月隆社長に、自社の強みと今後の成長戦略について聞いた。

範多機械 代表取締役社長 **大月 隆** 氏

―小型道路機械の中でも、市場占有率の高い品もあります。

―アスファルトフィニッシャと、凍結防止剤散布車の2品目で売り上げの70%を占める。アスファルトフィニッシャはシェアは80%近いとうかがいています。

―次の看板商品は生まれそうですか。

―5月社長は人事畑が長いようですね。

―当面の経営課題は何ですか。

―弊社は少数精鋭で運営しており生産性は高い。ただ主力の竹島工場の能力は限られており、売り上げを増やすのは簡単ではない。それよりも合理化、効率化を進め利益を確保するのが先決。ある程度ライン化できているのはアスファルトフィニッシャだけで、後はバッチ生産になっている。まだ改善の余地はあるので精進したい。また

〝人〟を大切に 100年企業目指す

道路機械・舗装機械専門メーカー
HANTA
https://www.hantak.co.jp/

無断転載・複写禁止ⓒ㈱日刊工業新聞社